巻　頭　言

アフリカ国立公園（African National Parks）

●伊谷純一郎
（日本アフリカ学会長）

タンザニア国立公園協会のブライソン総裁から，同国第二の規模をもつルアハ国立公園のゾウの頭数の算定を依頼されたことがある。チンパンジーの調査で手が回らず，数年後ブライソン氏が急逝されて，この計画は流れてしまった。ゾウの重要性はわかりきっているのだが，ゾウは喬木の樹皮を剝いで枯らし，それによる植生の変化は，植生のみならず動物相をも変貌させる。従って，公園管理の上から，これは深刻な問題だったのである。

私たちの長年の努力で1985年に設立されたマハレ山塊国立公園は，足で歩いて野生のチンパンジーの行動を目近かに見ることができるというのが目玉になっている。ところが昨年から園内にライオンが出没するようになり，数頭のチンパンジーが食われた。公園の周辺では人畜にも被害が出，由々しい問題になっている。アフリカの国立公園は大自然と人間との出会いの場でもあるのだが，とかく予期せぬ問題がおこり，解決が迫られるのである。

アフリカの多くの国々が，地球上に残された最後の楽園を国立公園の動物保護区として国土の中にもち，その維持管理に喘いでいる。どの国立公園を訪ねても，質素な設備が目に映るのだが，実はあまりにも貧しく，上記のような不慮の事態や，より立ち入った自然の究明と対処ができるような体制からは縁遠いというのが現状なのである。しかし，それらの国立公園こそは，現代に生きる世界のすべての人びとが，後世に伝える義務をもったかけがえのない遺産なのである。

これまでにも，国際機関や民間の保護団体等による，アフリカの国立公園保全のための援助は続けられているのだが，それが微々たるレベルにとどまっていることは，私自身の体験からも言明できる。金が動き人手が加われば，その分だけ自然は破壊されるというのも事実であろう。しかし，より大局に立ち先見の明に基づく援助のレベル・アップこそ，即刻に必要だと言ってよいにちがいない。